

「その時、現場はどう動いたか」

3. 11の震災直後の動向

1 宮城県気仙沼向洋高等学校の概要（沿革、環境、施設等）

本校は平成23年に創立百十周年を迎えた歴史と伝統のある専門高校である。前身の「気仙沼町立水産補習学校」は男子校で、戦後の学制改革により「宮城県気仙沼水産高等学校」となった。その後、昭和52年、本校は南三陸リアス式海岸の観光名所の一つである岩井崎付近に学校を移し、海岸線に極めて近い距離に学校が建つことになった。その理由としては水産を専門とした高校であったため、海は実習をする上で必要不可欠なものだからである。そしてその翌年には男女共学になった。平成6年、学科改編に伴い校名を「宮城県気仙沼向洋高等学校」と変更し、情報海洋科、産業経済科、機械技術科の3つの学科を有する現在の形になった。施設面においては、平成15年に体育館を改修、平成22年には2年の歳月をかけて校舎の大規模改修工事に取りかかり、平成23年3月中旬に北校舎が完成間近の状態であった。

2 当日地震発生までの本校の様子

平成23年3月9日、宮城県内の公立高等学校にて一般入試学力検査が実施された。翌3月10日、本校教職員は採点日にあたっており、入試の合格発表に向け忙しい時間を過ごしていた。そして、3月11日は、平成22年度の最後の授業日であった。本校3学年合わせて9クラスのうち、3年生は3月1日に卒業をしており、1、2学年6クラス、約220名近くの生徒が登校していた。授業を終えたのは正午近くであり、いくつかのクラスが分散会と称して中庭付近でHRを開いていた。その他のクラスの生徒たちは部活動か帰宅の途に着いていた（後からの確認で地震発生時、約170名の生徒が学校に残っており、約50名の生徒が帰宅していたことがわかった）。

3月11日（金）・・・授業（午後から入試事務作業）
 生徒・・・・・・・・在校生（1、2年生）約220名の内、170名近くの生徒が学校に残り、
 補習やクラス行事、部活動などを行っていた。

3 地震発生時の本校の動き

消防計画における本校の避難経路には2パターンある。一つは火災発生時。そしてもう一つは地震発生時のものである。火災発生時は所定の経路を使い校庭に避難、生徒点呼後、避難指定してある約1km離れた地福寺というお寺に移動する。地震発生時は一旦、校庭に避難、点呼後、状況に応じて校舎4階に避難するというものであった。3.11の地震発生時は消防計画通りであれば、校舎4階に避難するパターンであったが、校内に残っていた多くの生徒は校舎外の中庭や体育館、校庭にいた。その状況には



理由があった。地震発生当日は入試関連の会議や作業があったので、職員室のある南校舎は午後から生徒立入禁止となっていた。それに加え、生徒の教室がある北校舎が大規模改修工事に伴い、それに

代わるプレハブの仮設校舎が校庭にあったことから、地震発生直後プレハブ校舎にいた生徒たちは、すぐに目の前の校庭に飛び出したと考えられる。この流れからすると南校舎4階に改めて避難するより、近所の避難所である地福寺に教員、生徒が避難する方が自然の流れであった。後日、当日校内にいた生徒たちの状況を聞いてみたところ、体育館や中庭にいた女子生徒の数名は腰を抜かした状態になり、自力で立ち上がることが困難な状況であり、その混乱の中でその女子生徒たちを連れて校舎内の4階まで行くことは無理だったようである。結局、近くにいた教員が自家用車にその生徒たちを乗せて地福寺まで移動させた。

4 津波襲来までの動き

ここで、津波襲来までの本校の動きについて着目して行くが、校舎内の動きと校舎外の動きに分かれることとなる。ここではまず初めに校舎内の動きについて時間経過も含め書くことにする。

【 校舎内の動き 】

校舎内では地震発生直後、情報を得るため南校舎1階にある事務室に管理職をはじめ約20名の教職員が自然と集まって来たが、地震による停電のため事務室内のテレビからは情報を得られなかった。しかし、ある教員が所持していたワンセグ携帯電話から情報を得ることができ、当地方に6～7mの津波が襲来することを知る。[地震発生後5分経過]

その後、校舎内に生徒が残っていないのを確認し、管理職からの指示で事務室となりの校長室内金庫に保管されていた指導要録と入試のデータ類、事務室からは金庫内の重要書類、通帳、公印等を残った教職員で南校舎3階に運んだ。また、同時進行で本校情報部の職員が機転を利かせ、2階職員室



となりの印刷室からサーバー機器を3階まで運んだ。さらに他の職員がストーブと灯油を3階に運んだ。後日、その時の管理職になぜ3階だったのかを聞いたところ、その根拠としては、過去のチリ地震での大津波のデータによると本校3階は安全圏ということであった。しかしながら、その後の情報で津波の高さが6～7mではなく10mを超す大津波であることを知り、3階まで運んだ荷物は管理職の機転により、もう一つ上の4階に運び直すこととなった。しかしながら津波の襲来によりストーブを4階に運ぶ余裕はなかった。そして大規模改修工事中の

工事関係者26名も校内に残った教職員とその後合流し、行動を共にすることになった。その間、腰上くらいの高さの第1波が校舎を襲った。[地震発生後37分後]

次に第2波、第3波が校舎4階まで到達するが、マスターキーを持ってきた職員のお陰で、普段鍵が掛かっている屋上に出ることができ、何とか難を逃れることとなった。しかしながらその時の様子を教職員に改めて聞くと、津波は当初目視では4階校舎を飲み込みそうな高さであり、屋上に避難した先生方もその瞬間は覚悟を決めたそうである。幸いにも手前の冷凍工場等にぶつかることで勢いは幾らか吸収され、4階の1m位までの到達で収まってくれた。また、その津波がぶつかった冷凍工場（鉄筋建て）が本校校舎に向かって流されて来たにもかかわらず、校舎正面直撃を免れたことも不幸中の幸いであった（冷凍工場は結局4階ベランダに激突した）。この2つの幸運が重なって何とか命を取り留めた形となった。

またこの日、別のドラマもあった。この大津波によって学校付近の多くの住宅は流され、残念ながら校舎後方の波路上漁港にその姿を消して行く中、逃げ遅れた女性2人を乗せた住宅2階部分が本校校舎と生徒会館の間に偶然にも挟まった。それに気付いた本校職員がローテーションを組み、一晩中声を掛けて励まし、そして翌朝、明るくなるのを待って2人の女性を救出した。さらに一番奥に建っている実習棟に地域住民3名が避難しており、その方々とも合流し、水で囲まれた校舎から脱出しようと、流れ着いたボートを引き寄せ、合計51名が無事脱出することに成功した（挟まっていた家の中にいた方は自力脱出ができなかったため、数名の職員と校舎内に残り数時間遅れで救出された）。[地震発生から20時間後]



校舎内・・・地震発生後、情報を得るため校舎1階にある事務室に管理職をはじめ約20名の教職員が自然と集まった。地震による停電のため、テレビからは情報を得られなかったが、ワンセグ携帯電話から情報を得て、津波の到来を知る。

(地震発生後5分経過)



管理職からの指示で、事務室となりの校長室内金庫に保管されていた指導要録と入試のデータ、事務室からは金庫内の重要書類、通帳、公印等を校舎3階に運んだ。また、同時進行で本校情報部の職員が機転を利かせ、2階職員室となりの印刷室からサーバーを3階まで運んだ。さらに他の職員がストーブと灯油を3階に運んだ。



書類等の荷物をいったん3階まで運んだが、管理職の機転によりさらに4階に運んだ。(ストーブを4階に運ぶ余裕はなかった。)

その間、新校舎を建設中の工事関係者26名も合流することになる。



腰上くらいの高さの第1波が校舎を襲う。(地震発生後37分後)



その後、第2・第3波が校舎4階まで到達するが、マスターキーを持ってきた職員の機転により、普段鍵が掛かっている屋上に行くことができ、何とか難を逃れることができた。その後、校舎4階から波が引いたのを見計らって、後ろに建設中の新校舎4階に移動し、一晩過ごした。朝方に校舎に引っかかっていた住宅から2名の女性を救出し、さらに実習棟に避難していた地域住民3名とも合流し、その後明るくなるのを待って、使えるボートを捜し、校舎から合計51名が脱出することができた。

【 校舎外の動き 】

地震発生直後、校内に残っていた多くの生徒が校庭に飛び出して来た。発生した地震がこれまでに体験したことのない揺れの強さと長さだったので、津波を警戒したと考えられる。本来、津波を警戒するならば校舎4階に上るべきなのだろうが、先にも書いたように多くの生徒が中庭や体育館にいたことから、校庭への避難は至極当然であったと考えられる。その後、数十名の教職員の指示のもと近所の指定避難場所である地福寺へと約170名の生徒が移動を開始する。[地震発生後5分経過]

※地福寺・・・気仙沼向洋高校から約1 km離れた所にあるお寺であり、過去のチリ地震津波の影響もなかったことから地域住民の避難場所という意識が強かった。また、境内に全校生徒を集合させるだけのスペースがあったことで、本校にとって避難場所に好都合であった。

生徒、教職員合わせて約200名近くが地福寺に一旦避難することになる。この時点での津波の情報は6～7mであった（車の車内TVでの確認情報だが、地福寺に到着する頃には10mを超す大津波に変わっていた）。

地福寺に到着し、境内で生徒に腰を下ろさせ点呼を取ろうとした。しかし、その場にいた教職員からもっと高いところに避難すべきだという意見が出たので、それならば200名近くの人が集合出来る



スペースはどこかと考え、地福寺から1 km離れた階上駅に避難するという意見にまとまり、階上駅に向かった。駅へ向かう途中、余震はかなり続いており、瓦などが降ってくる可能性が高かったので、教職員側が自然と気を利かせ、先頭、中間、最後尾に分かれ生徒たちに注意を促しながら駅まで誘導した。[階上駅到着 地震発生後40分経過]

途中多くの地域住民に会い避難するよう促したが、瓦礫の片付けなどをして避難する様子はなかった。その後襲った津波によって、地福寺を含むその地域は多大な被害に遭った。

余震が続く中、何とか階上駅に到着し、点呼をとるため駅前の広場に生徒全員に腰を下ろさせた。しかしその瞬間、階上駅よりもっと上にある国道方面から津波が迫っているから早く逃げろと叫ぶ声が聞こえた。そしてその声に引っ張られるように生徒たちを国道へ、そしてさらに後方にある階上中学校へと避難させた（階上駅から国道に上がる際、恐怖のため腰を抜かし動けなくなる生徒が数名おり、教職員が肩を貸したり、おんぶしたりして国道まで逃がした）。[地震発生後45分経過]

校舎外・・・地震発生とともに津波を警戒し、避難指定場所（近所の寺）に教職員の誘導のもと、素早く移動した。（地震発生後5分経過）

↓
いったん、避難指定場所に移動し、腰をおろさせた。

※この時、車内のテレビで6～7mの津波が来るという情報を知る。

しかし、実際には10mを超える大津波であった。

↓
指定避難場所であったが、その時の職員達の判断で、もっと高いところに避難しないとあぶないということで、そこから1 km先の階上駅に移動する。

（地震発生後30分経過）

↓
階上駅に移動後、腰をおろさせたが、近所の方が津波が迫っていると叫んでいたため、さらに数百m先の階上中学校に避難した。（地震発生後45分経過）

↓
結果的に校内に残っていた生徒全員（約170名）と避難誘導した教職員（27名）が無事避難することができた。

5 震災当日の夜（避難先の階上中学校にて）

3月11日の夜は雪が降る大変寒い夜であった。生徒約170名、教職員27名は避難した階上中学校の2教室を借りて一夜を過ごすこととなった。教室に入り冷静になって逃げてきた生徒の格好に目を

やると、部活動中に逃げてきた生徒などは雪が降っているにもかかわらず、Tシャツ、短パン姿で大変気の毒であった。とにかく寒さをしのがなくてはならず、中学校にあったカーテンや暗幕を借り、何とか寒さをしのぐしかなかった。その後、農協に勤務している本校卒業生が救援物資として階上中学校に自分の職場から燃料や食糧を運んでくれたので、教職員や生徒が率先して配ることになった。特に本校生徒たちは空腹であるにもかかわらず、救援物資の食糧を体育館にいた一般の避難者に全て分け与え、ビスケット1枚口にしようとしなかった。

夜中になると数名のお年寄りが低体温症の状態ですぐトラックの荷台に乗せられ運ばれて来た。その場に居合わせた数名の教員がその運び込みを手伝う場面も見られた（後日その運ばれた方々が亡くなったのを知る）。

一方、階上中学校校舎内では機械技術科の教員がその場で即席にラジオを組み立て、さらに廊下の照明を作成、設置し、真っ暗闇の廊下に灯りを灯し、避難した方々の不安を和らげようとしていた。

結局、この晩のうちに多くの保護者の迎えがあった。また、保護者の方々から気仙沼市内の様子や道路状況など貴重な情報を得ることが出来た。さらに近所や知り合いの生徒もついでに運んで頂いた。この晩のうちに約半数（約90名）の生徒が保護者とともに帰宅できた。また、残っていた生徒の半数（約40名）が何かしら家族と連絡がとれていた。

翌早朝、教職員でミーティングし、辺りが明るくなるのを待って残っている生徒数を把握するとともに、家庭との連絡が取れているか再確認することにした。また、家庭と連絡が取れている生徒はタイミングを見て帰宅させ、連絡が取れていない生徒に関しては安全のため避難所の階上中学校に留めることにした。教職員も家族と連絡が取れていない者や自宅に被害のあった者は一旦帰宅し、その他の教職員は出来るだけ避難所に残り、対応にあたることにした。



6 生死の分かれ目

当日校内に残っていた生徒、教職員は全員難を逃れることができたが、当時は必死で考えもしなかったが、後になって冷静に考えてみると様々な要因が生死を分けていたと考えられる。その中でも特に生死を分けたと考えられるのは、津波に対しての「危機意識の高さ」ではないだろうか。

気仙沼向洋高校は海岸近くに立地しており、その為そこに通う教職員、生徒たちは津波を想定しつつ日々生活していたと考えられる。また、当時はマスコミ等でも地震予測のニュースは頻りに流れており、危機意識向上に少なからず影響していた。さらに東日本大震災の約1年前、チリで発生した地震の影響で気仙沼地方に津波による避難勧告が出ており、その時津波を警戒して重要書類を3階に運んだ経緯もあった。（結局、大きな津波は来なかった。）

また、生死の分かれ目の一つに、当日の教職員の行動も挙げなければならないだろう。何れも結果論ではあるが、教職員が打合せもなしに各自が機転を利かせ、その状況に応じてやらなければならないことを的確に協力し、行動できたことは、当時の状況を振り返れば決して当たり前のことではない。まさに津波の恐怖の中、人として教育者として責任ある行動をした結果である。その他にも細かいことではあるが、生死の分かれ目、データ保存のポイントが考えられるので、上記に挙げたことも含め挙げてみる。



- ①校舎が海に近かったこと。
(海が近すぎて教職員、生徒ともに普段から危機意識が高かった。)
- ②校内にいた教職員が打ち合わせなしに生徒を避難させる者と書類関係を運ぶ者に分かれて行動できたこと。
- ③ある程度のマニュアル保持とそれを超えた行動ができたこと。
- ④普段、指導要録や入試のデータを保存している場所を多くの教職員が把握していたこと。
- ⑤書類関係を3階ではなく4階に移動するよう管理職が指示したこと。
(4階にある鍵の掛かるキャビネット上部に保管したので被害がなかった。)
- ⑥情報部の多くの先生が校内に残り、サーバーの存在に気づいたこと。
- ⑦職員がマスターキーを持って避難したこと。
- ⑧4階を担当している職員が地震発生後、4階の全ての部屋の鍵を解錠したこと。
- ⑨3階のストーブは流されたが、たまたま4階にストーブが1台あったこと。
(当日は雪が降る大変寒い夜であった。)
- ⑩大震災1年前にチリ地震があったこと。
(1年前に津波を警戒して荷物を3階に移動したことがある。)

7 おわりに（御礼）

3. 11の震災で学校にいた生徒、教職員の命は全員無事だったが、これは前述したが、様々な要因が偶然良い結果につながっただけではなく、生徒、教職員がそれぞれの立場で臨機応変に動いた結果だと改めて感じた。震災から1年以上が経過し、3校に分散して再出発した学校生活ではあったが、この年の平成23年11月にはプレハブの仮設校舎も完成し、全校生徒が一つになることができた。これもひとえに復興にご協力頂いた全国の皆さんや地域の方々のお陰だと感謝している。しかしながら、本校において震災被害の影響は様々な面でまだ色濃く残っており、震災から1年が経過した今、やっと私達の復興はスタートラインに立てたレベルである。引き続き多くの方々からのご支援、ご協力が必要な状況に変わりはないものの、気仙沼向洋高校の生徒、教職員一同、逆境に負けずこれからも邁進していきたいと考えている。

文責 宮城県気仙沼向洋高等学校
教諭 小野寺 文男